2P-36

甘味嗜好とその背景要因との関係

○加藤佳子　井川佳子
（広島大学・教育）

目的　人は生まれながらにして甘味を好む傾向を持っており、多くの人は高齢になっても甘味嗜好を持続している。一方、年齢による生理的な変化と共に、様々な知識を得、食経験を積み重ねる中で、甘味嗜好にも質的な変化が生じてきていると考えられる。そこで、性や年齢や甘味に対する行動、嗜好、イメージなど甘味への評価と、甘味嗜好との関連を探ることを目的として研究を進めた。

方法　12歳～15歳の男37名、女46名、18歳～29歳の男48名、女53名、30歳～39歳の男女計35名、40歳～49歳の男女計34名、60歳以上の男女計37名、合計290名を対象とし、2.5%～20%濃度の蔗糖溶液、及び異なった種種の糖溶液（蔗糖、キシリトール、エリスリトール）の嗜好程度を調べる2種類の官能検査を行った。同時に、甘味に対する行動、嗜好、イメージなど甘味への評価を問う質問紙調査を行った。調査期間は、2000年11月から12月であった。

結果　2.5%、5%の蔗糖溶液は、30歳代をピークに好まれていた。10%蔗糖溶液は、どの年代にも広く受け入れられていた。20%蔗糖溶液は、30歳代で最も好まれておらず、年齢の低い層と高い層で受け入れられていた。このことから、30歳代に甘味濃度の受容に関する分岐点があると考えられた。甘味に対するイメージ、好きな味付けの程度などは、蔗糖濃度及び異なった種類の糖に対するの嗜好に影響していた。